

はじめての江戸東京野菜講座

江戸東京野菜には物語があります。

この講座は、東京にも伝統野菜があることを
もっと多くの方に知っていただきたいとの願いから開催します。
人の手によって、種から種へと命をつなぎつづける東京の伝統野菜の物語。
和食が世界から注目されるなか、初心者の方にも楽しんでいただける入門講座です。
この機会にぜひご参加ください。

(受講されたあと、さらに詳しく知りたい方には別途専門コースもご案内します。)



- | 日 時 | 6月25日(土) 13:00 ~ 16:00
- | 会 場 | 新宿御苑「インフォメーションセンター」2階レクチャールーム
東京都新宿区内藤町11(下の地図をご参照ください)
- | 講 師 | 大竹道茂(江戸東京野菜コンシェルジュ協会 会長)
上原恭子(江戸東京野菜コンシェルジュ協会 理事)
- | 内 容 | 江戸東京野菜にまつわるエピソードや歴史をとおして、
江戸からの食文化の変遷と、種から種へと命をつないで伝わってきた
東京の伝統野菜について、食味体験も含めてお話しします。
*ご希望の方には、当日11:00より新宿御苑内の四季折々の自然の見所や
歴史を紹介するガイドツアーを開催します。お気軽にご参加ください。
- | 受講料 | 3,500円(当日お支払いください)

お申し込み・お問い合わせ受付メールアドレス: jimukyoku@edo831.tokyo

*お申し込みの際は、メールタイトルを **新宿御苑6月講座申し込み** とし、
本文に以下の事項をご入力の上、送信してください。

氏名 / フリガナ / 郵便番号 / 住所 / 電話番号(できれば携帯) / メールアドレス

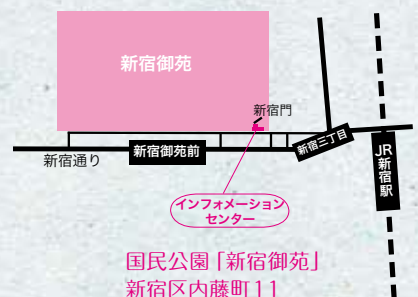
*受付後、申込み受付完了メールをお送りいたします。

受信設定をしている場合は、上記アドレスが受信できるように設定変更してください。

*定員になり次第、受付を締め切らせていただきます。

*受付完了メールが届かない場合は、お手数ですが下記までお電話ください。

TEL. 090-2423-0831



江戸東京野菜って？

江戸時代から昭和40年代頃まで、東京都内の農地で数世代以上にわたって栽培されていた固定種(自家採種した種子からほぼ同じ形質のものが育つもの)の野菜をいいます。それぞれの野菜にはさまざまな物語があり、味や形など個性あふれる特徴も。まさに東京の伝統野菜で、現在42種類が認定されています。



砂村一本ネギ

天正年間(1573～1592)に摂津(大坂)から、江戸の砂村(現在の江東区北砂・南砂)や品川などに持ち込まれた葱。関東では葉葱の栽培が難しく、根本を土寄せて白葱が生まれたという。



伝統大蔵ダイコン

江戸時代、豊多摩郡(現在の杉並区あたり)の源内という農民が作りだした「源内つまり大根」が源。のちに明治初期、世田谷区大蔵の石井泰治郎氏が、秋つまり大根と、代々木の源内大根の自然交雑種を改良し、選抜固定した。



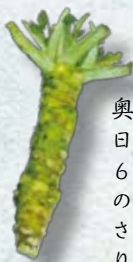
伝統小松菜

8代将軍・徳川吉宗が鷹狩りに出かけた際、小松川村で休息した。そこで食べた青菜をいたく気に入り、地名から名付けたとされている。



亀戸ダイコン

文久年間(1860～64)の頃から昭和初期まで、亀戸香取神社周辺で栽培され、明治の頃は先端の葉の形から「おかめ大根」「お多福大根」と呼ばれていたが、大正初期に産地の名をつけて「亀戸大根」と呼ばれるようになった。



奥多摩ワサビ

日本原産の伝統香辛料で、文政6年(1823)の『武蔵名勝図絵』の多摩・梅沢村の項に「山葵(わさび)この地の名産なり、多く作り手江戸神田へ出す」とある。



馬込三寸ニンジン

大田区西馬込の篤農家の品種改良により生まれた、長さ10cmほどの人参。元となる西洋種の人参が伝わったのは明治初期の頃で、それまでは「滝野川人参」に代表される長さ1mもある長人参が主流だった。



馬込半白キュウリ

瓜と「大井胡瓜」を掛け合わせて改良した下半分が白い胡瓜。明治30年頃から改良を重ね、節になる形になったのは明治37～38年頃で、「馬込半白節成(ふしなり)胡瓜」と呼ばれるように。

ノラボウ菜

明和4年(1767)に関東郡代官が、食用・油用として「關婆菜(じゃばな)」の種を、五日市村など12村に配布するよう命じた古文書が残る。のち、この菜が天明や天保期の大凶作の際に人命を救った。



新宿御苑と江戸東京野菜

新宿御苑は、江戸時代には信州・高遠藩内藤家の下屋敷のあったところ。内藤家の菜園では「内藤カボチャ」「内藤トウガラシ」が栽培され、特産物となりました。明治になると、その地に官営農事試験場「内藤新宿試験場」が設けられ、日本の農業・園芸の先駆的な役割を担いました。



内藤トウガラシ

品種は八房(やつぶさ)唐辛子。七色唐辛子(七味と呼ぶのは上方風、江戸では七色)などに調合され、広く親しまれてきた。



内藤カボチャ

内藤家の菊座南瓜(きくざかぼちゃ)は新宿で名をはせ、周辺の角筈村や柏木村でも栽培されるようになり、地場野菜として定着していった。



寺島ナス(蔓細千成ナス)

『新編 武蔵風土記稿』に葛飾郡の茄子について「他の産に比すれば最も早し。よりに形は小さいなれど、早生なすと呼び賞美す」とあり、寺島辺りでも盛んに栽培されていたことから名づけられた。



東京ウド

幕末に多摩郡の吉祥寺で始められたウド栽培は、多くの関係者が技術開発、改良に尽力した。その結果、北多摩一円は品質・生産量ともに日本一のウド産地に成長したという。

(江戸東京野菜写真提供: 福島秀史)